

## 「カントの超越論的観念論」

野内 聡

はじめに

カント哲学を形容するいくつかの言葉のなかに「超越論的観念論」がある。観念論と自ら名のなるとで他の観念論と同一視される危険を冒してまでなぜカントは「超越論的観念論」にこだわったのだろうか。

まず注目すべきは、「超越論的観念論」が他の観念論<sup>①</sup>を批判するために主張されていることである。他の観念論とは、カントによれば「外的感官のすべての対象の現存在を疑わしい」[A968]のもとし、その「外的現象の観念性」「同上」を主張する教説のことである。つまり観念論の立場に立つと、われわれが自分以外の何らかの「もの」を見ているとき、われわれが見ているのはその「もの」それ自身ではなく、われわれの内にある、すなわち心の内

にあるその「もの」のイメージとなる。そうだとすると、われわれが認識しているのはそのもの自身ではなく、あくまでも心の内にあるそのもののイメージや表象だということになり、そこから、われわれの心の「内」にそのものが存在するとは言えても、われわれ自身の「外」にそのものが本当に存在しているかはわからないのではないかと、という疑問が生じてくる。これが観念論者たちをもつ懐疑である。このような「外的現象の観念性」を主張する観念論を、第一版「第四誤謬推理」においてカントは「経験的観念論」と呼び、それを批判するものとして「超越論的観念論」を唱える。

次に注目すべきなのは第一版「第四誤謬推理」と第二版「観念論論駁」における観念論批判の方法の差異である。『純粹理性批判』において、「超越論的観念論」を語る上で中心的な役割を果たすこの第一

版「第四誤謬推理」と第二版「觀念論論駁」は、觀念論批判というその目指す目的は同じながらその方法には明らかに違いが見られる。この方法の変化が同時にカントの「超越論的觀念論」の変更をも意味するのかが問題である。

したがって、最初に、批判の対象である經驗的觀念論をカント自身がどのようにとらえていたかを考察し、次に第一版「第四誤謬推理」における觀念論批判、そして第二版「觀念論論駁」における觀念論批判を検討し、最後に両版の共通点と相違点からカントの「超越論的觀念論」の特質にせまりたい。

## 1 經驗的觀念論

問題はわたしの「内」にあるものを確実なものとし、わたしの「外」にあるものをが現に存在することを疑うところにある以上、これらの觀念論を考察していくにあたって、「われわれの内にあるもの」と「われわれの外にあるもの」、「それ自体においてわれわれの外にあるもの」<sup>②</sup>という三つの観点からみていくことは有効な方法だと思われる。この区分に従うと、經驗的觀念論の主張は次のようにまとめ

ることができる。現象は「われわれの内にあるもの」に表象に属し、「われわれの内にあるもの」のみが直接的に知覚可能である。そのとき空間時間は「われわれの内」に存する形式ではなく、「それ自体としてわれわれの外にあるもの」に物自体に付随する関係、属性のようなものである。そのように考えると「それ自体としてわれわれの外にあるもの」の表象が、「われわれの内」に存する「われわれの外にあるもの」としてあらわれてくる。その意味では、「それ自体われわれの外にあるもの」は「われわれの内」に存する「われわれの外にあるもの」の原因となる。直接的に知覚されるのは「われわれの内」に存する「われわれの外にあるもの」だけだが、本来的な意味で存在することができるのは「それ自体としてわれわれの外にあるもの」だけである。「われわれの内」に存する「われわれの外にあるもの」は「それ自体としてわれわれの外にあるもの」の結果として、二次的な意味しか持たない。「わたしの外にある現実的対象の現存在は……決してただちに知覚において与えられてはおらず、むしろ単に内的感官の変様である知覚に対して、それの外的原因として付加的に考えられうること、した

が「推論される」といふのである。」[A367]したがって「われわれの内」に存する「われわれの外にあるもの」の存在は、因果関係にもとづき結果から原因への推論のみにより確認される。つまり、原因である「それ自体としてわれわれの外にあるもの」から、結果である「われわれの内」に存する「われわれの外にあるもの」が生じたのであろうという推論がなされる。しかし、一つの結果はいくつもの原因から生じることができるので、結果から原因への推論はつねに不確実なままである。だから、「われわれの内」に存する「われわれの外にあるもの」を直接的に知覚したとしても、そこから原因が「それ自体としてわれわれの外にあるもの」であるかどうかを確証することはできない。すると、「それ自体としてわれわれの外にあるもの」と因果関係に結ばれることによつて、「われわれの内」に存する「われわれの外にあるもの」の存在が確保されていたのであるから、その因果関係が確実に立証されない以上、「われわれの内」に存する「われわれの外にあるもの」が現実存在するかどうかは分からない。「知覚とその原因との関係において、この原因が内的であるか外的であるか、したがつてすべてのいわゆる

外的知覚がわれわれの内的感官の単なる戯れでないかどうか、あるいはそれらの外的知覚がその原因としての外的な現実的対象へ関係するかどうかは、つねに疑問のままである。」[A368]<sup>(3)</sup>

経験的観念論の問題点は、「われわれの内」に存する「われわれの外にあるもの」の存在をどう証明するかにある。経験的観念論者は、「それ自体としてわれわれの外にあるもの」との因果関係によつてそれを立証しようとしたが、結局は懐疑論に陥らざるをえなかつた。それは、第二版「観念論論駁」において批判の対象とされる蓋然的観念論の立場でもまったく同様である。このような懐疑に陥る観念論をカントは自らの「超越論的観念論」をもつて批判する。カントによる観念論批判がいかなるものか次に見ていきたい。

## 2 第一版「第四誤謬推理」における観念論批判

超越論的観念論の主張は次のようなものである。まず経験的観念論と同様カントも「われわれの内にあるもの」の直接的知覚から出発する。「わたし自身の内にあるものだけが直接に知覚されることが

きる。」[A367]しかし、時間空間のとらえ方が経験的観念論とはまったく異なる。超越論的観念論の立場では、時間空間はわれわれの感性の形式であり、物自体に付随する関係、属性ではない。「時間と空間とはわれわれの直観の単なる感性的形式にすぎず、物自体としての諸客観の、それ自身だけで与えられた規定あるいは条件ではない。」[A369]したがって、物が実際にあるということとは、「それ自体として外にあるもの」に対する推論からその存在の確証をえることによって成立するわけではない。それはあくまでも「われわれの内にあるもの」の内側で、すなわち表象同士がどのように結合しているか、あくまで経験的法則にしたがって形成されることで成立する。「われわれの外にあるもの」つまり経験的にわれわれの外にある何らかのものは、あくまでも「われわれの内」においてのみ成立し、その成立に関して「それ自体としてわれわれの外にあるもの」はなんの関わりも持たない。

その時「われわれの内にあるもの」として確実なものモデルとされているのが「我思う、ゆえに我あり」の「わたしは存在する」<sup>(4)</sup>である。「物質の現存を認めはするが、単なる自己意識を越えてでゆ

くことはなく、だから、わたしの内にある諸表象の確実性以上の、したがって、我思う、ゆえに我あり以上の何ものかを想定することはない。」[A370]この「わたしは存在する」をわれわれが直接意識していることからわたしの「存在」は絶対確実なものとする。「わたしはわたしの諸表象を意識しており、したがってこれらの諸表象およびこれらの諸表象を持つわたしは現存する。」[A370]

次に「わたしは存在する」をモデルとして、今度は他の「われわれの内にあるもの」、すなわち「われわれの内」に存する「われわれの外にあるもの」も、「われわれの内」に存するというまさにそのことを根拠として「わたしは存在する」と同様にその存在を確証される。「外的な諸事物が現存するのは、わたし自身が現存するのと同様であり、つまり両者はともにわたしの自己意識を直接の証拠として現存する。」[A371]

むしろ、「われわれの内」に存する「われわれの内にあるもの」と「われわれの外にあるもの」とは区別されねばならない。カントは感官の区別によって、すなわち、「われわれの内にあるもの」は内的感官に關係し、「われわれの外にあるもの」は外的

感官と関係するということによって「われわれの内にあるもの」と「われわれの外にあるもの」を区別するのである。

以上『純粹理性批判』第一版「第四誤謬推理」における「超越論的觀念論」の主張は次のようにまとめられる。まず基盤となるのは、他の觀念論と同様「われわれの内にあるもの」であった。しかし、時間空間は「それ自体としてわれわれの外にあるもの」に付随するものではなく、「われわれの内にあるもの」である。したがって、「われわれの外にあるもの」は「それ自体としてわれわれの外にあるもの」からの因果関係によつて成立するものではなく、「われわれの外にあるもの」も「われわれの内にあるもの」として直接的な「知覚」によつて現実存在する。その時、直接的で確実なものモデルとして考えられているのが「われわれの内にあるもの」としての「わたしは存在する」である。「われわれの外にあるもの」も「わたしは存在する」と同様に「われわれの内」に存するということから、「われわれの外にあるもの」が現実存在すること、も確実とされる。つまりカントにとつて「外的」といつてもそれは「それ自体として外にあるもの」を

さすのではなく、「われわれの内」に存する「われわれの外にあるもの」をさすのである。そして、「われわれの内」に存する「われわれの内にあるもの」と「われわれの外にあるもの」は、内的感官によつて時間において表象される「われわれの内にあるもの」と外的感官によつて空間において表象される「われわれの外にあるもの」という形でそれぞれ区別される。

さて、第一版「第四誤謬推理」におけるカントの觀念論批判のポイントは、經驗的觀念論があくまでも結果から原因への推論によつて存在を確保しようとするのに対して、超越論的觀念論は推論による存在証明をさけ、あくまでも「われわれの内にあるもの」の内側において存在を証明しようとしているところにある。そのため時間空間を「それ自体としてわれわれの外にあるもの」に付随するものと考えずにあくまでも「われわれの内にあるもの」と考えるのである。では第二版「觀念論論駁」における觀念論批判はどのようなものだろうか。

### 3 第二版「觀念論論駁」における觀念論批判

第二版「観念論駁」では、第一版「第四誤謬推理」で「われわれの内にあるもの」のモデルとされた「わたしは存在する」をさらに詳細に分析することで観念論批判をおこなう。そのことはすでに「観念論駁」における定理「わたし自身の、単なる、しかし経験的に規定された意識が、わたしの外にある空間における諸対象の現存在を証明する」[B275]に明確にあらわれている。カントはこの定理を、内的経験（「われわれの内にあるもの」の経験）が「時間」とどう関わるか、ということから証明しようと試みる。

そもそも「わたし自身の経験的に規定された意識」とは、「わたしは存在する」ということが時間において規定されているのを意識することである。「わたしはわたしの現存在を時間において規定されているものとして意識して、*ing.*」[B275]なぜなら「時間は、内的感官の形式、いいかえれば、わたしたち自身とわたしたちの内的状態の直観の形式以外の何物でもない」[B49]からである。時間において規定されるということは「何か持続的なもの」[B275]を前提としなければならない。そして、この「何か持続的なもの」を知覚するためには、外的

経験（「われわれの外にあるもの」の経験）が必要不可欠である。われわれはわれわれの外にある何らかのもの、たとえば、太陽の運動や月の満ち欠けなどがないとそもそも時間を規定することはできない。「わたしたちが時間規定をおこなうことができるのは、空間における持続的なものと関連した外的関係（たとえば、地上の諸対象と関係した太陽の運動）の転変（運動）をつうじてのみである。」[B277]

そもそも「わたしは存在する」という表象は、わたしの現存在を直接それ自身に含んでいるが、それ自身は決して「認識」や「経験」であるわけではない。経験には直観が与えられていなければならない。「わたしは存在する」が認識であるためには内的直観が必要であるが、時間に規定された内的直観のためには時間を規定するための外的な対象が必要であるから、そのようなわれわれの外にある対象、外的事物を欠くこの「わたしは存在する」は認識ではなく、また経験でもないのである。したがって「わたしは存在する」という表象はいかなる直観でもなく、考えるわたしの単に「知性的な」表象にすぎず、もちろん「何か持続的なもの」ではありえない。「自我という表象におけるわたし自身について

の意識は全然いかなる直観でもなく、思考する主観の自己活動のたんに知性的な表象にすぎない。」[B278] いかえると「内的経験」を通じて、わたしがわたしの現存在を意識しているということは、あくまでもわたしの現存在の「経験的意識」であり、この意識が成立するためには「わたしの外にあるもの」と関わる必要があるのである。もしこの意識が「知的意識」だとしたら、感性的なもの、わたしの外にあるものを必要とせずに私の現存在を規定することができてしまう。知的意識は経験的意識に先行はするが、それによつてはわたしの現存在は決して規定されず、その規定には外的事物が必要なのである。「あの知的意識はなるほど先行しはするが、わたしの現存在がそこでのみ規定される内的直観は、感性的であり時間条件に結び付けられているのに、この規定は、それゆえ内的経験自身も、わたしの内にはなく、したがってわたしの外にあるもの内にもある何か持続的なものに依存しているであつて、わたしはわたしがこの持続的なものとの対立関係にあるとみなさざるをえない。」[Bx1]

さらに第一版「第四誤謬推理」と同様、「われわれの内にあるもの」の経験（Ⅱ内的経験）が唯一直

接的で、そこから外的事物が推論されるという方法もここでは退けられる。カントの立場から述べるならば反対に内的経験ではなく、外的経験こそが直接的なのである<sup>6)</sup>。「さきにわたしたちが証明したのは、外的経験こそ本来直接的であるということである。」[B27] すなわち、わたしたち自身の現存在が時間によつて規定されているということ、すなわち内的経験は外的経験がなければ成立しないのである。

『純粹理性批判』第二版「觀念論論駁」における觀念論批判をまとめると次のようになる。「わたしの内にあるもの」としての「わたしは存在する」が「経験」的に成立するためには、時間に規定された内的直観が必要であるが、そもそも時間が規定されるためには外的な対象すなわち「われわれの外にあるもの」がなければならぬ。すると、「われわれの内にあるもの」としての「わたしが存在する」ということを経験的に意識することで、すでに空間内にある「われわれの外にあるもの」の現存在を証明しているのである。したがって、「われわれの内にあるもの」の経験（Ⅱ内的経験）を直接意識するということとは「われわれの外にあるもの」の経験（Ⅱ

外的経験)なしには成り立たず、経験的観念論や蓋然的観念論において主張されている懷疑はそもそも成立しないのである。

この驚くほど簡潔な観念論批判には、しかしながら第一版「第四誤謬推理」とくらべるといくつかの相違点がある。したがって次に、第一版「第四誤謬推理」と比較しながら第二版「観念論論駁」の観念論批判のポイントを探っていく、同時に両版の共通点と相違点から「超越論的観念論」の特質にせまっていきたい。

#### 4 超越論的観念論の特質

(1) 第一版「第四誤謬推理」と第二版「観念論論駁」における共通点

「あらゆる現象をすべて単なる表象と見なし、物自体とは見なさず、したがって時間と空間とはわれわれの直観の単なる感性的形式にすぎず、物自体としての諸客観の、それ自身だけで与えられた規定あるいは条件ではないとする学説」[A369]という定義をカントは「超越論的観念論」に与えていた。すると、時間空間の観念性というのが「超越論的観念

論」の、したがって観念論批判のキーポイントとなるのは明らかである。この点は、第一版「第四誤謬推理」と第二版「観念論論駁」をつうじて共通の前提となっている。第二版「観念論論駁」では時間空間の観念性ということは表立って語られてはいないが、バークリの独断的観念論に関しては「超越論的感性論において退けられた」[B274]とされ、明らかに時間空間の観念性を根拠として批判しており、デカルトの蓋然的観念論に関する批判においても、そこで語られる「なにか持続的もの」は感性の形式としての「空間」内にあるもの、すなわちあくまでも現象内部のものである。また当然、「時間」は物自体に付随する属性ではない。

時間空間の観念性は、「われわれの内にあるもの」と「われわれの外にあるもの」の定義とも関連する。超越論的観念論では「われわれの外にあるもの」は「それ自体としてわれわれの外にあるもの」ではなくあくまでも「われわれの内」に存する、すなわち空間内の「われわれの外にあるもの」なのである。この現象としての「われわれの外にあるもの」と「それ自体としてわれわれの外にあるもの」||物自体との区別は両版を通じて揺るぎないものと



してまったく一貫している。

以上から分かるように、カントの超越論的観念論は時間空間の観念性を根拠として「観念論批判」をおこなう。同時にここでもなぜ「観念論批判」が、超越論的「観念論」というように同じ「観念論」を称さねばならないかも明らかとなるであろう。観念論はそれが外的現象の「観念性」を主張するから「観念論」と呼ばれたのである。それならば、時間空間の「観念性」を主張する教説も当然同じ「観念論」を名のらねばなるまい。

時間空間の観念性を根拠として観念論批判を行なおうとするカントの立場は第一版「第四誤謬推理」と第二版「観念論論駁」を通じて変わっていない。しかし批判の方法はいくつかの点で異なっている。次にそれを検証しなければならぬ。

(2) 第一版「第四誤謬推理」と第二版「観念論論駁」の相違点

まず第一にあげられるのが、「われわれの外にあるもの」の性格の変化である。第一版「第四誤謬推理」では上で見てきたように、「われわれの外にあるもの」に関して、「われわれの内」に存する「わ

れわれの外にあるもの」と「それ自体においてわれわれの外にあるもの」の二つが考えられた。「われわれの外にあるもの」は「外」にあるものでありながらも、最終的には「われわれの内」に存するものとして「表象」であると考えられる。さらに、第一版「第四誤謬推理」においては「われわれの内にあるもの」である「わたしは存在する」をモデルとして「われわれの外にあるもの」も同じ「表象」であることから「われわれの外にあるもの」の現存在を証明しようとする。「外的な諸事物が現存するのは、わたし自身が現存するのと同様であり、つまり両者はともにわたしの自己意識を直接の証拠として現存する。」[A37] それに対して、第二版「観念論論駁」では「われわれの外にあるもの」は端的にわれわれの外にある「もの」である。それは第一版「第四誤謬推理」におけるそのように、単なる「表象」ではない。「この持続的なものの知覚はわたしの外にあるものをつうじてのみ可能であり、わたしの外にあるものの単なる表象をつうじてでは不可能である。」[B275]

第二点として、第二版「観念論論駁」では「それ自体においてわれわれの外にあるもの」(＝物自体)

に關する議論がまつたくなされていぬ。ここでカントがいう「外にあるもの」は「物自体」でもなく單なる「表象」でもない「現象」としての「もの」なのである。第二版「觀念論論駁」では「なにか持続的なもの」という概念が新たに導入されることで、「わたしは存在する」から「われわれの外にあるもの」へと第一版「第四誤謬推理」と同じようにアプローチしていく。しかし「わたしは存在する」を時間において規定されたものとして意識していることから「時間規定」にはわれわれの外にある「なにか持続的なもの」が前提されることを導きだしていくその方法は、第一版「第四誤謬推理」のそれとはまったく異なつたものとなるのである。

さらに第三点として、「内的經驗」と「外的經驗」との關係においてもその方法の相違ははつきりと認められる。第一版「第四誤謬推理」においては、「われわれの内にあるもの」（＝内的經驗）から出発しそこから「われわれの外にあるもの」（＝外的經驗）をも基礎づけていったが、第二版「觀念論論駁」においてはそれとは逆にむしろ「外的經驗」こそが「内的經驗」を基礎づけるように述べられる。「ここで証明されるべきであつたのは、内的經驗一般は外

的經驗一般をつうじてのみ可能であるということだけであつた。」[B278] 簡単にまとめると、第一版「第四誤謬推理」においては基礎づけの方向は「内」から「外」へと向かい、第二版「觀念論論駁」では「外」から「内」へ向かつていたのである。

とはいつても、第二版における基礎づけの方向は、「内」を徹底的に突き詰めた結果それが必然的に「外」を必要とすることに気がついた、というのが正しいかもしれない。なぜなら、カントは第二版「觀念論論駁」では、「われわれの内にあるもの」すなわち「わたしは存在する」という表象を、より深く分析することで、それが知性的な表象ではなく内的「經驗」であるためには、必然的に「わたしの外にあるもの」と関わらざるをえないことを明らかにしたからである。

では第一版「第四誤謬推理」と第二版「觀念論論駁」におけるこのような方法の相違はどこから生じたのだろうか。カントの「超越論的觀念論」についての定義をもう一度思い起こそう。超越論的觀念論とは、「あらゆる現象をすべて單なる表象と見なし、物自体とは見なさず、したがって時間と空間とはわれわれの直觀の單なる感性的形式にすぎず、物自体

としての諸客観の、それ自身だけで与えられた規定  
あるいは条件ではないとする学説」のことである。  
前述したように後半部分の時間空間の観念性の部分  
は第一版「第四誤謬推理」と第二版「観念論論駁」  
を通じて一貫しているので問題はない。ただ前半の  
「あらゆる現象をすべて単なる表象と見なし」の部  
分はどうであろうか。第一版ではたしかに基礎を  
「われわれの内にあるもの」＝表象におき、そこか  
ら「われわれの外にあるもの」を基礎づけていつ  
た。そこではたしかに「あらゆる現象をすべて単  
なる表象と見なし」ていたであろう。だが第二版では  
どうか。「この持続的なものの知覚はわたしの外  
にあるものをつうじてのみ可能であつて、わたしの外  
にあるものの単なる表象をつうじてでは不可能であ  
る」[B275]という文における「表象」の使い方は、  
「あらゆる現象をすべて単なる表象と見なし」す超越  
論的観念論の立場と抵触するのではないだろうか。  
なぜなら、「あらゆる現象をすべて単なる表象と見  
なし」すならば、当然「わたしの外にあるもの」も、  
それが「現象」だとしても、いや「現象」だからこ  
そ「表象」と見なされなければならないからであ  
る。

しかし、そもそも「表象」とはなんだろうか。「表  
象」が「何かを表わす」ものだとしたら、ある「何  
か」が表象されて、その「何か」を表わす「表象」  
が生じるという図式が成り立つ。ここには原因結果  
の因果関係が成り立つように思われる。そして、  
「表象」に基盤をおき、そこからその「表象」によつ  
て表わされた「何か」を推論する方法は、カントに  
よつて批判された「観念論」の立場にほかならな  
い。カントは第一版「第四誤謬推理」において「観  
念論」を批判しながら、同時におのれ自身、表象の  
因果関係に引きずられていたのではないだろうか。  
なぜなら、第一版「第四誤謬推理」においてカント  
は消極的ながら表象の原因となる「何か」について  
語っているからである。「わたしたちの外的な諸直  
観については、超越論的な意味においてわたしたち  
の外にありうるあるものが、その原因であるという  
ことは、なるほど認めることはできるが、しかしこ  
のあるものは、わたしたちが物質や物的なものの  
表象で解しているような対象ではない。」[A372]そ  
して「表象」の原因となるこのような対象は「超越  
論的对象」「同上」と呼ばれている<sup>6)</sup>。「表象」にこ  
だわると自分自身の足元をすくわれる可能性があ

る。それに対して、第二版「観念論論駁」においてはこのような誤解をさしはさむ余地はどこにもなくなっている。

第一版「第四誤謬推理」と第二版「観念論論駁」の相違点は、両版における「表象」概念の変化と何らかの関係があるのではないだろうか<sup>(7)</sup>。むしろ『純粹理性批判』第一版から第二版への移行には、第一版に対するさまざまな批判が影響している<sup>(8)</sup>。しかし、それに反論するためだけにカントが自説をそう簡単に変えるとも思えない。そうすると超越論的観念論の特質に関して、やはり第一版「第四誤謬推理」と第二版「観念論論駁」における「表象」概念の変化は注目に値すると考えざるをえないのである。

### おわりに

「超越論的観念論」による観念論批判の根拠は、感性の形式としての「時間空間の観念性」にあった。この点に関しては第一版「第四誤謬推理」と第二版「観念論論駁」で一貫している。しかし、両版における「表象」概念の変化が新たな問題として提

出された。「あらゆる現象をすべて単なる表象と見なす第一版「第四誤謬推理」における「表象」と、現象における「もの」とは区別された第二版の「表象」は同じ「表象」でもその意味合いは異なる。これが「表象」概念の単なる多義性や曖昧さによるものなのか、それとも超越論的観念論と大きな関連があるのか、いまはつきりと断定することはできない。しかしカントの「表象」概念を考察することで、カント哲学の一つの局面が見えてくるように思われる。

本稿は「超越論的観念論」の特質をなす「時間空間の観念性」に関して何らの考察もしていない以上はなほだ不十分なものである。「表象」概念の探求と合わせて今後の課題としていきたい。

### 註

『純粹理性批判』からの引用は第一版をA、第二版をBで、ページ数をアラビア数字で示す。また、翻訳に際しては原訳を参照したが、部分的に表現を変えたところもある。

- (1) 以下特に明記しない場合、「観念論」は超越論的観念論とは区別された、したがってカントが批判の対象とする観念論を意味することとする。
- (2) この区分の仕方については、久保元彦著『カント研究』九六頁参照
- (3) このような「経験的観念論」の立場は、第二版「観念論論駁」における「蓋然的観念論」とも共通する。ここでは重複する部分が多いため「蓋然的観念論」の考察は省略した。
- (4) 「わたしは存在する」(Ich bin)という語に関して、[B277]参照。ここでは第一版「第四誤謬推理」と第二版「観念論論駁」との連関を考え、第一版「第四誤謬推理」における観念論批判を述べている箇所ではあるが、あえてこの語を使用した。
- (5) むろんだからといって外的経験が時間に優先するわけではないように思われる。「なにか持続的なもの」が持続的であると時間規定されるためにはアプリアリな形式としての時間が必要だからである。したがって、両者はお互いがあってはじめて成り立つものであり、そうすると「わたしは存在する」ということをわたしは時間において規定されていることを意識することは、必然的に私の

外にある何らかのものによって可能となる。ここから上述の定理が導きだされるのである。

- (6) カントにおける「表象」概念の考察は、久保の前掲書、特に「内的経験」の章を参照。

- (7) 第一版「第四誤謬推理」と第二版「観念論論駁」における表象概念の変化に関しては、牧野英二著『カント純粹理性批判の研究』二六一頁、石川文康著「論争家としてのカント」(『現代思想』三月臨時増刊\*カント\*)一六〇—一六一頁参照
- (8) このあたりの事情に関しては石川の前掲論文参照

(のうち さとし 早稲田大学)